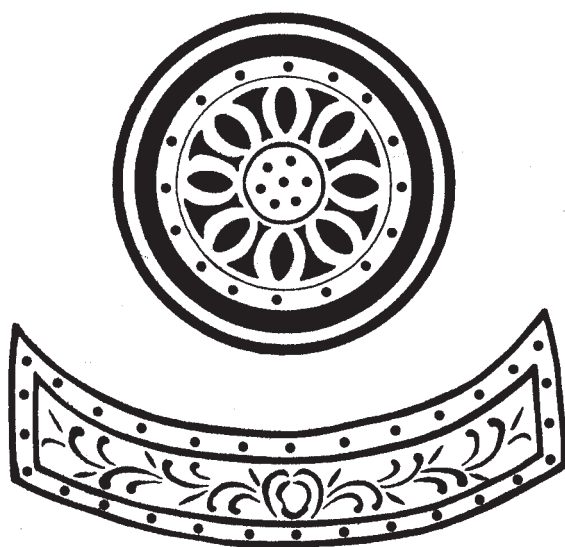


三重県鈴鹿市

伊勢国分寺跡

- 第3次発掘調査概要報告 -



1991.3

鈴鹿市教育委員会

序

鈴鹿市は地理的に畿内と東国を結ぶルート上にあたり、古来より伊勢国の中心地として栄えてきました。市内には約1100箇所の遺跡が確認されていて、県内でも有数の遺跡の宝庫として知られています。中には伊勢国府跡あるいは軍団跡と比定される広瀬長者屋敷遺跡を始め、金製垂飾付耳飾りを出土した保子里古墳など重要な遺跡も少なくありません。

伊勢国分寺跡は大正11年に国史跡に指定されましたが、寺城や伽藍配置が不明なまま約70年が経過してまいりました。近年の開発の波はこののどかな国分丘陵にまで押し寄せ、市でもレインボウヒルズ計画の一環としてこの地が史跡公園として位置づけられることとなりました。教育委員会でも一刻も早く保存整備の基本計画を策定すべく、昭和63年度より寺城確認を主眼とした発掘調査により着手したところであります。

本年度は寺城確認調査の第3年次にあたります。昨年度の調査で寺城がほぼ明かになりましたが、今年度も引き続き寺城周辺の調査と、今回初めて推定の域を出なかった国分尼寺跡の確認調査を実施いたしました。その結果、西高木2地区からは南門跡と思われる遺構を始め、西谷4地区からは瓦を転用した住居跡が見つかるなどの多くの成果が得られました。

なお、本年度も文化庁並びに八賀晋先生、県教育委員会、埋蔵文化財センター、多くの方々からご指導とご協力をいただきました。ここに改めて感謝の意を表します。

平成3年3月31日

鈴鹿市教育委員会
教育長 市川 年夫

例 言

1. 本書は三重県鈴鹿市国分町に所在する国史跡伊勢国分寺跡第3次発掘調査の概要報告書である。
2. 調査箇所はそれぞれの字名をとり地区名とし、本年度は次の4箇所を実施した。また、現地調査は1990年10月11日～12月23日までを要した。

(調査地区)	(調査面積)
西谷4地区(鈴鹿市国分町字西谷127-2番地)	120 m ²
西谷5地区(鈴鹿市国分町字西谷132-2番地)	106 m ²
西高木2地区(鈴鹿市国分町字西高木230番地)	126 m ²
南浦1地区(鈴鹿市国分町字南浦1395番地)	150 m ²
3. 発掘調査は平成2年度国庫補助金を得て、以下の調査体制で行った。

調査主体	鈴鹿市教育委員会(教育長 市川年夫)
調査指導	八賀 晋(三重大学人文学部教授) 別所忠雄(三重県教育委員会文化振興課課長) 仲見秀雄(鈴鹿市文化財調査会会長)
調査担当	鈴鹿市教育委員会事務局文化課 大杉 順(鈴鹿市教育委員会文化課課長) 中森成行(同 文化財係長) 浅尾 悟(同 指導主事) 藤原秀樹(同 文化財係) 新田 剛(同 文化財係)
4. 調査にあたり特に八賀晋先生には遺構・遺物全般にわたりご指導をいただいた他、次の方々よりご指導・ご協力をいただいた。(敬称略)

須田 勉(文化庁記念物課)、伊藤久嗣、山田 猛(県教育委員会文化振興課)、山沢義貴、伊藤克幸、駒田利治、近藤 健(県埋蔵文化財センター)、谷本鋭次、倉田直純(斎宮歴史博物館)、小玉道明(県学事文書課県史編纂室)、大場範久(神戸高等学校)、田中安一、辻 裕之、神戸中学校、平田野中学校、国分町・木田町・山辺町の皆さん
5. 座標は国土座標第 系、方位はすべて座標北を用いた。
6. 遺構の略記号は次の通りであり、また、遺構番号は第1次調査からの連番である。

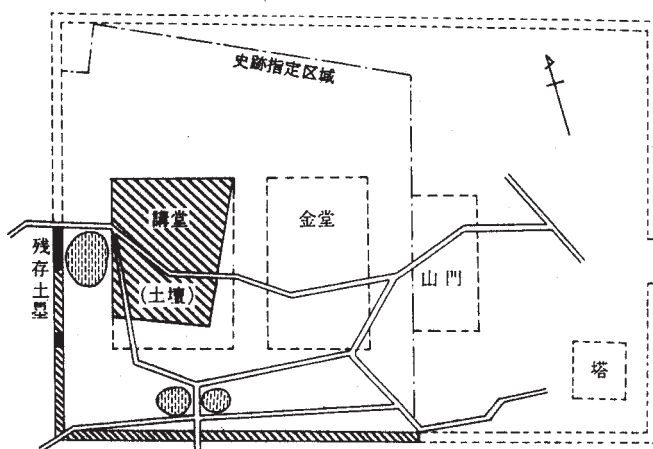
SB...	住居跡	SD...	溝	SA...	築地・柵列	SK...	土坑
SF...	焼土坑	SX...	その他遺構				
7. 遺物の断面の黒塗りは須恵質土器、白抜きは土師質土器を表している。
8. 現地調査及び本書の編集・執筆は浅尾が行った。

．これまでの調査と研究

伊勢国分寺跡は大正11(1922)年に国史跡の指定を受けたが、その経緯については必ずしも明かではない。江戸期寛政年間の「東海道名所図絵」にはすでに国分寺の名が見え、早くから「伊勢国分寺跡」として認識されていたようである。また、宝暦年間成立の「三國地志」には「国分村南二方三百歩八カリ荒曠ノ地礎石破 散在セル」とあり、すでにこの頃には明確な地上の遺構は消滅していたものと思われる。

伊勢国分寺跡を考古学的に初めて考察したのは津市の郷土史家・鈴木敏雄氏であった。「河曲村考古誌考」(1936年)によれば、当時、顕著な遺構として土塁と土壇を指摘している。土塁は土壇の西に北土塁(長さ十五間、幅三間半、高さ五尺)と南土塁(長さ二間半、幅三間半、高さ五尺)の2カ所であるが、古老の話として、数十年前までは、この土塁よりさらに南に数十間、そこから東に約百間の土塁が存在したことを記している。その土塁の上部には約九尺毎に頂上より三尺下方に3個の石を水平に埋設していたということである。土塁は不整長方形で、南北四十間、東西中央部で二十四間を計るが、50年程前までは土塁は南にさらに約十二・三間広がっており、高さも周囲より約二間程高かったという。また、北辺では、長を縦に一列に埋設した箇所があったり、高さ二寸程の小型の金銅仏一体を発見したという。さらに鈴木氏は土塁の位置や土壇の形状、微地形等を考慮して、残存土壇は「講堂」であり、東に「金堂」及び「門」を推定する東面の伽藍配置を想定している(第1図参照)。なお、土壇は現在は南北約30m、東西20mと戦前の半分以下になっているし、土塁も1960年代までは残存していたが、現在は無い。

国分僧寺の位置については異論を挟む余地は無いが、国分尼寺については未だ確定的な比定地は定まっていない。萱生由章「常慶山国分寺縁起」(明和8年)や「勢陽五鈴遺響」(天保4年)には松阪市伊勢寺を尼寺跡として推定しているが、論外であろう。国分集落内の光福寺には「伊勢国分寺陳跡碑記」(亨和2年)があり、金光明寺(南院)と法華寺(北院)の存在を記している。南院は現国分集落の字南浦、鉄工所及び墓地付近に、北院は常慶山国分寺より以北の地にそれぞれ比定されており、鈴木氏はその「南院」を国分尼寺に比定している。古瓦は国分僧寺付近は言うに及ばず、国分集落や遠く東の寺山遺跡付近にまで散布しており、軒瓦が光福寺境内からも出土している他、南浦の地からは僧寺と異なる軒瓦が採集されており、一応この地を「尼寺跡」として推定している。



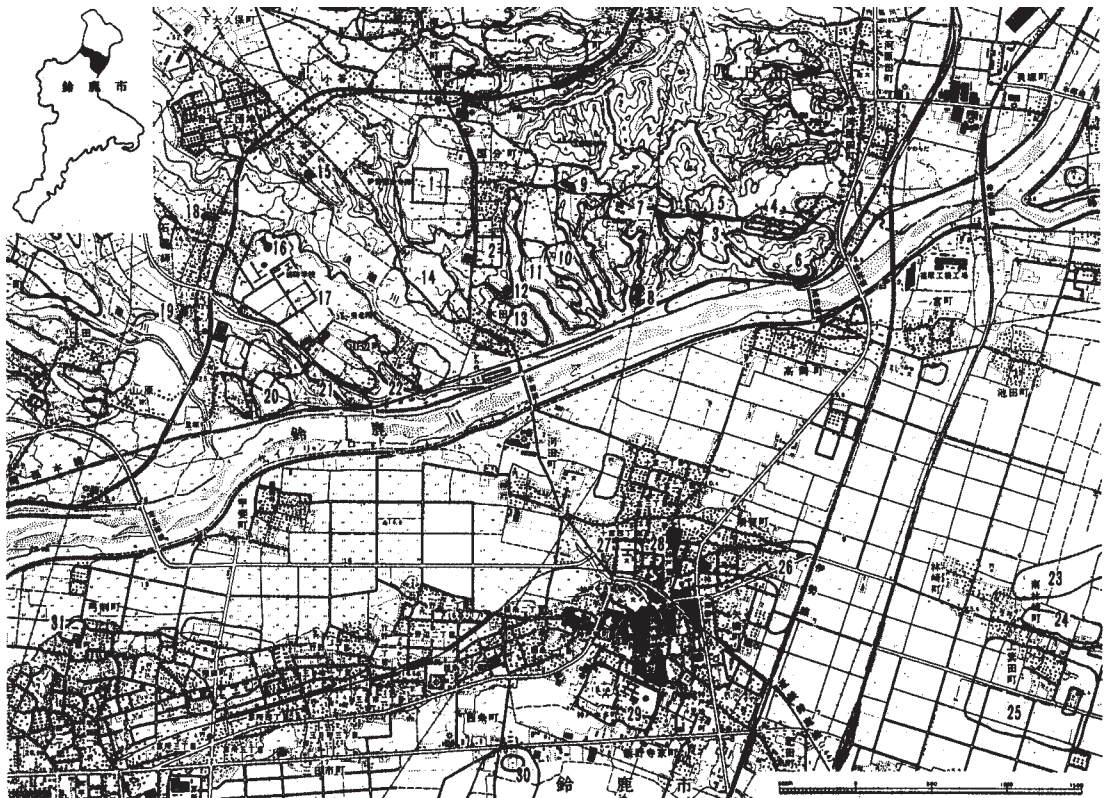
第1図 鈴木敏雄氏による伽藍想定図

1988年度第1次調査は西谷地区で2箇所、堂跡地区で1箇所実施した。西谷1地区では、寺域の西端を区切る築地(SA-W)とそれに伴う両溝、2×5間の身舎と庇を有する掘立柱建物(SB01)及び竪穴住居跡(SB02)をそれぞれ1棟検出している。築地は幅3.5～4m、溝は西の外溝で幅2.0m、深さ0.4mの規模である。SB02は一辺3.2mの方形をなし、東に造る竈は瓦を転用している。西谷2地区からは西谷1地区での築地から続く築地外溝を検出した。

1989年度第2次調査は堂跡地区で5箇所、西谷地区、西高木地区でそれぞれ1箇所実施した。西谷3地区からは北築地(SA-N)とその外溝が、堂跡2地区からは東築地(SA-E)の内溝が、堂跡3地区からは築地外溝の東北隅が、また、堂跡6地区と西高木1地区からは南築地(SA S)の内外溝がそれぞれ見つかった。その結果、伊勢国分寺の寺域を区切る築地が中心で東西178m、南北184m(約600尺)のほぼ正方形であることが確認されるに至った。

．位置と歴史的環境

三重県は南北に長く、鈴鹿川流域以北は北勢地方と呼ばれ、現在の行政区域でいう鈴鹿市は亀山市と共に北勢地方の南端に位置する。地形的には西の鈴鹿山系から続く丘陵地帯玄関口と、鈴鹿川南部の低湿地地帯に大別できよう。この地域は古来より畿内から東国へ



第2図 遺跡位置図 (1:50,000「鈴鹿(1:25,000)」国土地理院)

抜ける玄関口として早くから文化の摂取が行われた地域であり、県内有数の遺跡の密集地帯となっている。

鈴鹿川流域における旧石器時代の遺跡は高岡山遺跡群(3～6)でナイフ形石器が多数発見されており、この地域の歴史の始まりを求めることができよう。縄文時代では、草創期特有の有舌尖頭器が小社遺跡や椿一宮遺跡、亀山市正知浦遺跡などで、また、早期の押型文土器群が東庄内A遺跡や亀山市大鼻遺跡で発見されており、縄文時代が丘陵でも西部の山地に近い地域で始まったことを示唆している。前期・中期以降は徐々に南・東地域の台地に広がったものと考えられ、鈴鹿川中流域右岸の国府台地や左岸の津賀平でこの時期の遺跡が確認されている。

弥生時代前期の遠賀川系土器が上箕田遺跡(25)とその周辺(23・24)で見つかっており、鈴鹿川下流域南部の低湿地地帯で稲作が開始されたものと考えられる。しかし、中期以降はその集落が分散し、高岡・国分丘陵では最近の調査で拠点集落が発見されており、中尾山遺跡(10)では32基の方形周溝墓と31棟の竪穴住居跡が、扇広遺跡(5)では34棟の竪穴住居跡と5基の方形周溝墓が見つかっている。また、中期中葉以降は西の山麓地帯を中心に近江系の土器の出土が目立ち、近江との交流が注目される他、東ノ岡遺跡(3)と一反通遺跡(20)からは銅鐸片も発見されている。後期も後半になると遺跡数は格段に増え、青谷遺跡(4)をはじめ、須賀遺跡(26)、神戸中学校遺跡(27)、萱町遺跡(28)、本多町遺跡(29)など低地氾濫原自然堤防上にも集落は立地し、再び低地にその中心が移動したものと考えられる。

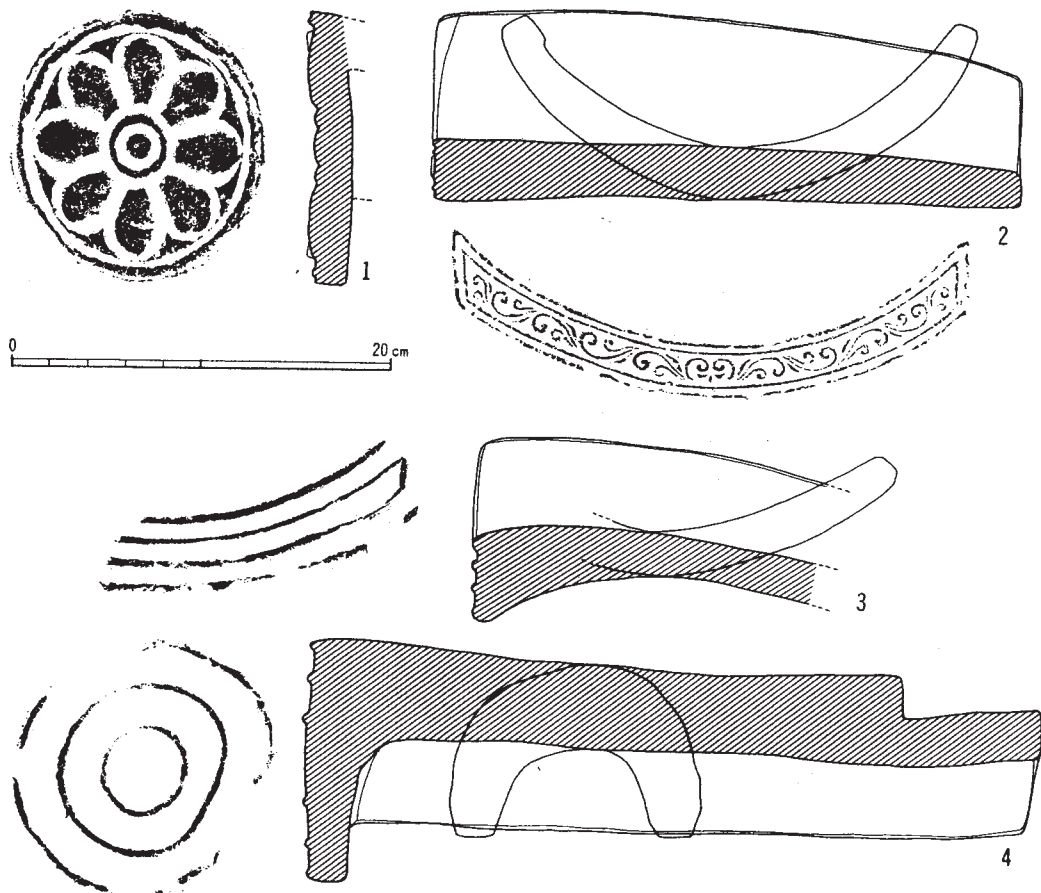
このような集落と肥沃な大地を背景に古墳文化が開花する。鈴鹿川流域における初現的古墳は亀山市能褒野王塚古墳や寺田山1号墳(8)などの前方後円墳であろうとされ、概ね4世紀後半の時期が想定される。それに続く古墳として愛宕山1号墳や西ノ野5号墳、富士山1号墳(9)などの前方後円墳があり、鈴鹿川流域全体が系統的に発達したのではなく、いくつかのグループの中で相互に影響しあい発達したものと考えられる。この地域の横穴式石室の受容は6世紀初め、亀山市井田川茶臼山古墳が最初であるが、なぜかこの鈴鹿川流域に限って横穴式石室を採用する古墳は意外と少ない。しかし、井田川茶臼山古墳の画文帯神獸鏡2面を初めとする数々の副葬品や保子里1号墳出土の金製垂飾付耳飾りなどはこの地域の文化の高さをよく物語っている。しかしながら、この時代の集落は前期、後期にも2、3の住居跡を検出する遺跡は多いが、拠点的な集落の所在は不明である。

この地域の白鳳寺院はよくわかっていない。ただ、岸岡天王屋敷遺跡出土の八葉素弁蓮華文瓦(第3図の1)と重弧文瓦は白鳳時代百濟様式末期の市内最古の瓦である。奈良時代になると名実ともに伊勢国の中心地として、この地に国府が営まれる。国府の所在地については、広瀬長者屋敷遺跡が最も有力視されており、重圀文軒丸瓦(第3図の4)や平城宮直系の均正唐草文軒平瓦(第3図の2)などの出土を含め、おびただしい瓦が散乱している。しかし、遺物は奈良時代に限られることから平安時代以降、国府は現在の国府町地域に移ったものと考えられている。この長者屋敷遺跡の東北東約7kmの地点に伊勢

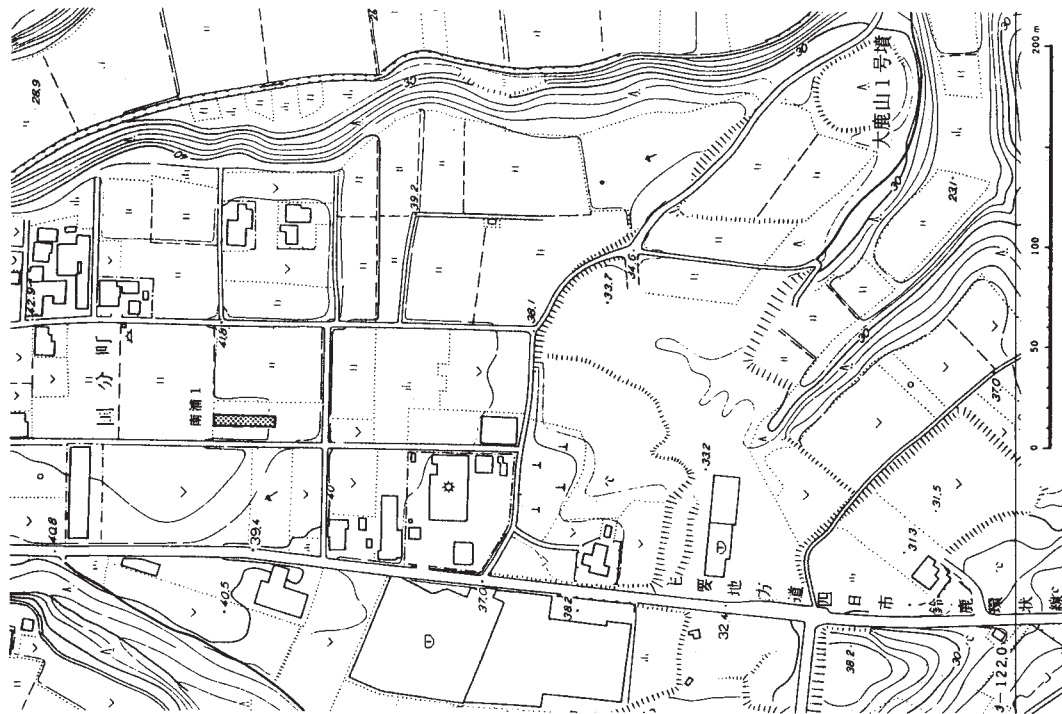
国分寺跡(1)が、その南東約500mに推定伊勢国分尼寺跡(2)が所在する。この国分寺が所在する国分丘陵は、鈴鹿川中流北岸にあり、このあたりは開析谷がよく発達し、舌状に伸びる台地上はすべて遺跡といっても過言ではない。その時代の集落はこの国分寺周辺でも見つかっており、寺山遺跡(7)では16棟の竪穴住居跡が検出されている。

平安時代以降の集落もこの地域では明らかではない。しかし、平安時代末期から鎌倉時代にかけての遺物は広範囲に散布していたり、国分寺跡の発掘調査でもこの時期の溝が検出されており、国分寺周辺でもこの時期の集落が存在することは確実である。あるいは現在の集落と重複していることも十分考えられよう。

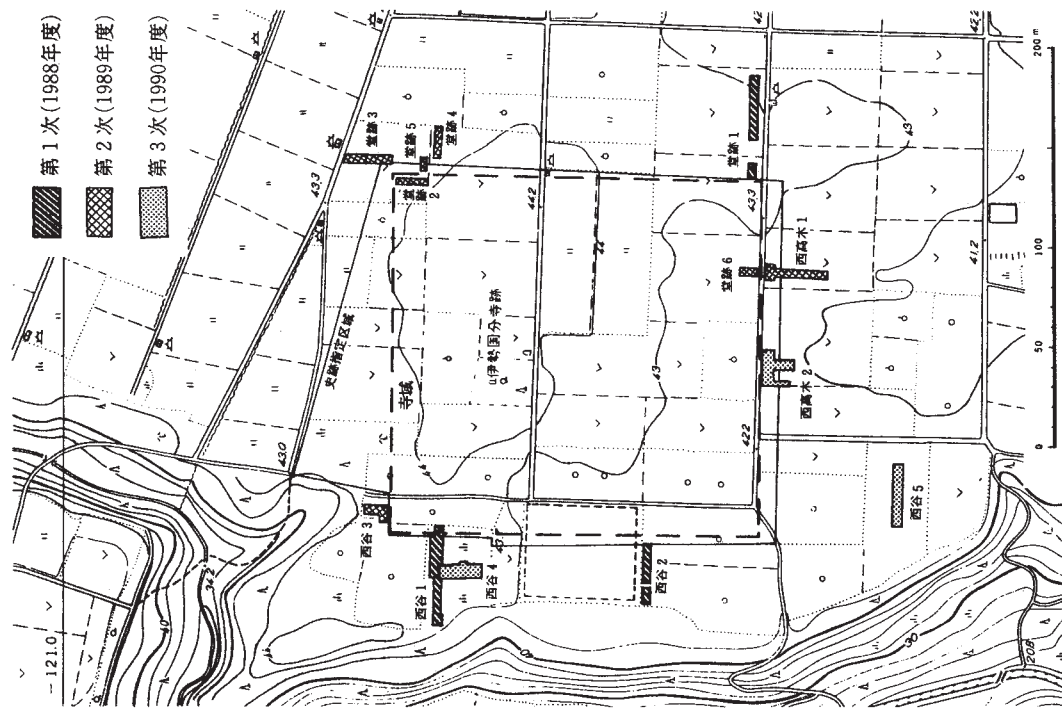
国分周辺で特筆すべきことは、豪族、「大鹿氏」の存在である。「日本書紀」敏達天皇4(575)年の条に「伊勢大鹿首」とあり、また、承安元(1171)年の「神宮雜書」には、「山辺御園給主散位大鹿国忠...当御園内大鹿村号国分寺領主...」ともあり、古代より大鹿氏がこの河曲郡の有力な豪族であったことや、平安時代末期以前からこの国分寺付近が「大鹿村」と呼ばれていたことが知られている。また、推定国分尼寺跡南方には「大鹿山(古墳)」として地名が残されている。このことは文献では追えないものの、国分寺造営にこの「大鹿氏」が何らかの関わりを持っていたことは容易に想像できよう。



第3図 岸岡天王屋敷遺跡(1)、広瀬長者屋敷遺跡(2~4)出土瓦実測図(1:4)



第5図 (推定) 国分寺跡発掘区位置図 (1:3,000)



第4図 伊勢国分寺跡発掘区位置図 (1:3,000)

・ 検出遺構

今回の調査で検出された主な遺構は次の通りである。

- 西谷4地区……建物跡2棟、溝3条、瓦列、
- 西谷5地区……建物跡、柵列、溝、土坑、
- 西高木2地区…築地跡、築地外溝、南門跡、瓦敷、火葬墓、
- 南浦1地区……溝6条、土坑、

(西谷4地区)

SB01 第1次調査ですでに確認されている掘立柱建物で、今次調査で新たに南庇が確認された。2間(4.6m)×5間(13.5m)の身舎に北を除く三面に庇がつく東西棟で、四面庇の可能性もある。全体規模は東西15.6m、南北6.9m以上で、棟方向はE0.5°W、柱掘形は深さ30-45cm、幅約50-60cmの方形をなす。奈良時代後半。

SB03 規模、プランは明確でないが、竈とその南に瓦列があることから、何らかの住居跡があったものと思われる。竈は4枚の平瓦を底に並べており、上部構造は不明であるが、両側に丸瓦の一部が立てられており、袖に使用されたものと思われる。竈の南方には貯蔵穴と思われるピットがある。瓦列は東西6.4mの規模で、丸瓦の玉縁部分を故意に欠き、現存で8個の瓦を上向きに並べている。両端に瓦を一つ置いて柱穴と思われるピットがある。瓦列は周囲の土を突き固めて固定している。奈良時代中葉。

SD10・17・18 SD10は幅40～70cm、深さ10～15cmの溝で、底に全面にわり細かい砂利を敷き詰めている。SD17は幅1.4～1.6m、深さ25cm、埋土上層には瓦や石が不規則に置かれていた。SD18は幅0.7～1.0m、深さ15cmでSB03よりも時期的に後出のものである。3条とも奈良時代後半以降。

(西谷5地区)

SB04 調査区西方で確認された南北棟の掘立柱建物で、東西2間(4.6m)×南北3間(柱間1.8m)以上の規模で、棟方向はN1.5°Eである。柱掘形は深さ35～50cm、幅約50cmの方形或いは円形をなし、2つの柱穴で幅10cm程の根石を据えている。奈良時代後半。

SD19 幅0.5～0.7m、深さ約0.3mの東西に伸びる溝で、中から瓦や拳大から頭大の石が多量に出土したが、暗渠というよりも廃棄時に投棄されたものと考えられる。平安時代末期。

SK07 東西65cm×南北75cm、深さ20cmの楕円形の土坑で、中より土師器杯と甕4個体分が投棄された状態で出土した。奈良時代前半。

(西高木2地区)

SA-S、SD05 寺域の南端を区切る築地跡とそれに伴う外溝である。築地は大半が現道路

下なので幅等は不明であるが、外郭線は座標X軸に対してE1°Nとやや傾きを芽つ。外溝は幅約2.2m、深さは最大で約40cmを計測する。溝は築地側で鋭角的に、反対側ではなだらかに傾斜している。また、溝の南西部で、東西約6m、南北約1.5mにわたって瓦が厚く堆積していた。瓦は軒丸瓦8点、軒平瓦16点を含み、完形の瓦も少なくない。奈良時代中葉。

SX01 築地は西端でややカーブを持ち、幅1.6mの溝を挟んで南北2.5mの不整形のテラスがある。このテラスの周囲にも軒瓦数点を含む多数の瓦が堆積していた。溝はその幅で東西に瓦がほとんど見られない地帯があり、後世(近世か)に改修された形跡がある。そうなればこのテラスが本来、築地とつながっていたことになる。テラスは版築は施されてはいないが、テラスの南側は、故意に何層にも埋めた跡が土層から確認される。

SX02 瓦敷遣構。築地外溝の南に南北約6m、東西3m以上にわたり、細かい瓦を固く敷き詰めている。ところどころ剥げ落ちているが、少なくとも調査区南全面には瓦が敷き詰められていたものと考えられる。瓦以外では灰釉碗の出土がある。平安時代中葉か。

SF01 東西50cm、南北70cm、深さ13cmの隅丸の方形を呈し、全面に赤色に火を受けており、火葬墓と思われるが、出土遺物は全く無く時期は不明である。

(南浦1地区)

SD25 幅55-85cmので深さ約60cmで断面はV字形を成す。上層で完形の2個体を含む多数の山茶碗の出土をみた。鎌倉時代前半。

SD27 ~ 29 SD27は幅1.1 ~ 1.5m、深さ約20cm、SD28は幅2.6 ~ 3.0m、深さ約25cm、SD29は幅約4m、深さ15cmで、共に出土遺物は若干の瓦片と山茶碗のみである。SD25 ~ 29は、出土遺物と方向を同じくしており、同一時期のものと考えられる。鎌倉時代前半。

SK08 長径2.8m、短径1.3m、深さ約25cmの不整形土坑で、須恵器杯、土師器甕、瓦片が投棄されていた。奈良時代後半以降。

・出土遺物

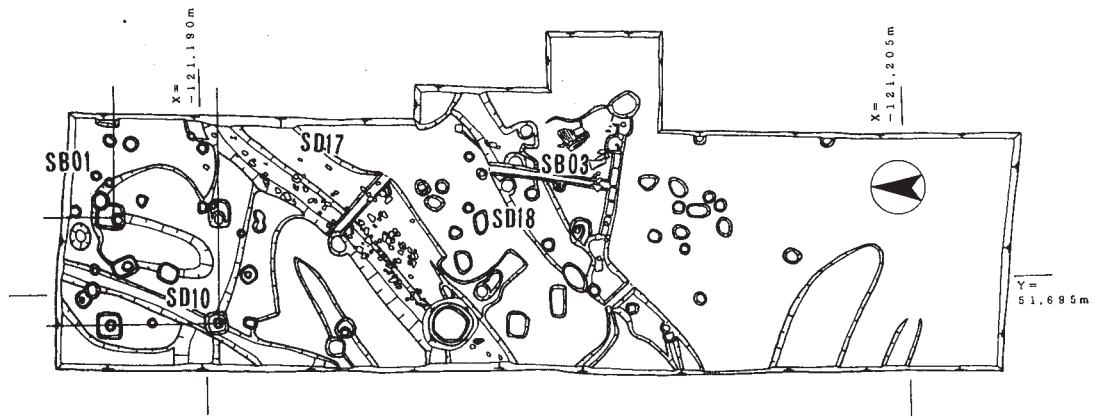
出土遺物の大半は瓦類で、その数は土嚢袋にして約200袋に達する。未整理の現段階ではひとまず軒瓦を中心に報告したい。数少ない土器類も半数以上は山茶碗であるが、少ないながらも土器は、弥生時代から江戸時代の各時代にわたっている。

1. 土器類

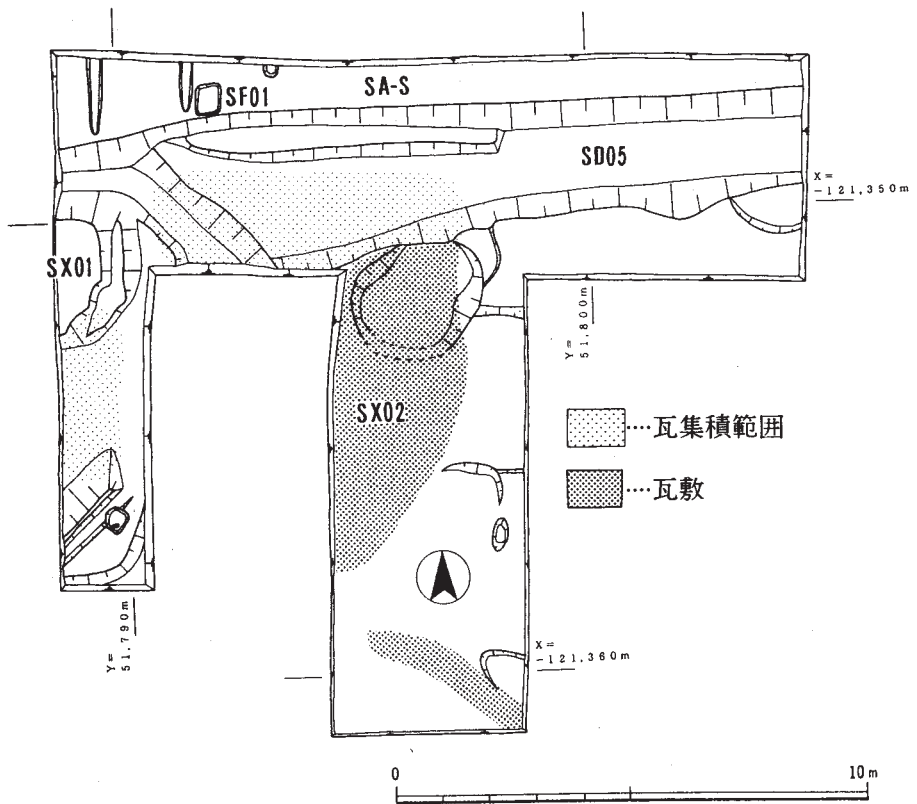
(西谷4地区) 1 ~ 7; SB03、9; SD17、8; SD18

土師器甕(1・2) 1は口径24.5cm、2は17.5cmで、ともに口縁は「く」の字状に大きく外反する。器壁の剥落が著しく調整技法は不明。

西谷 4 地区

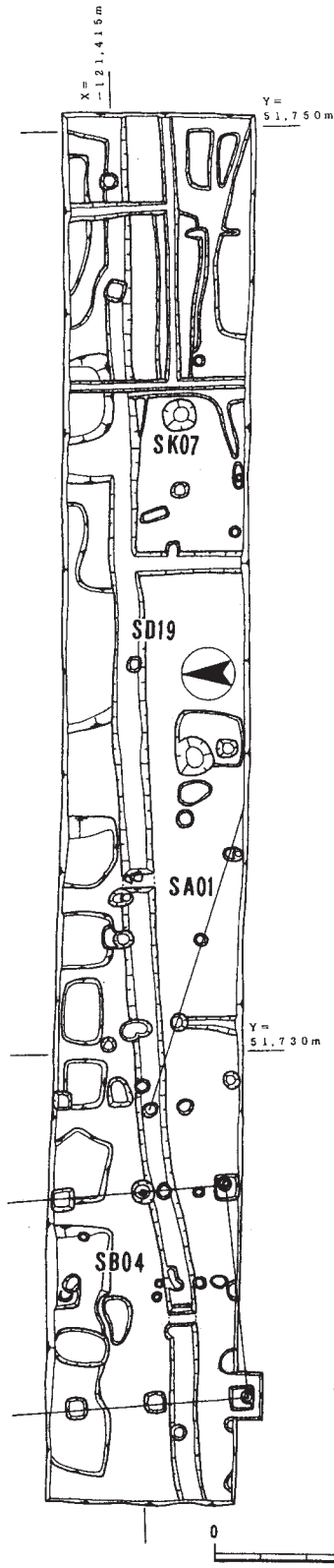


西高木 2 地区

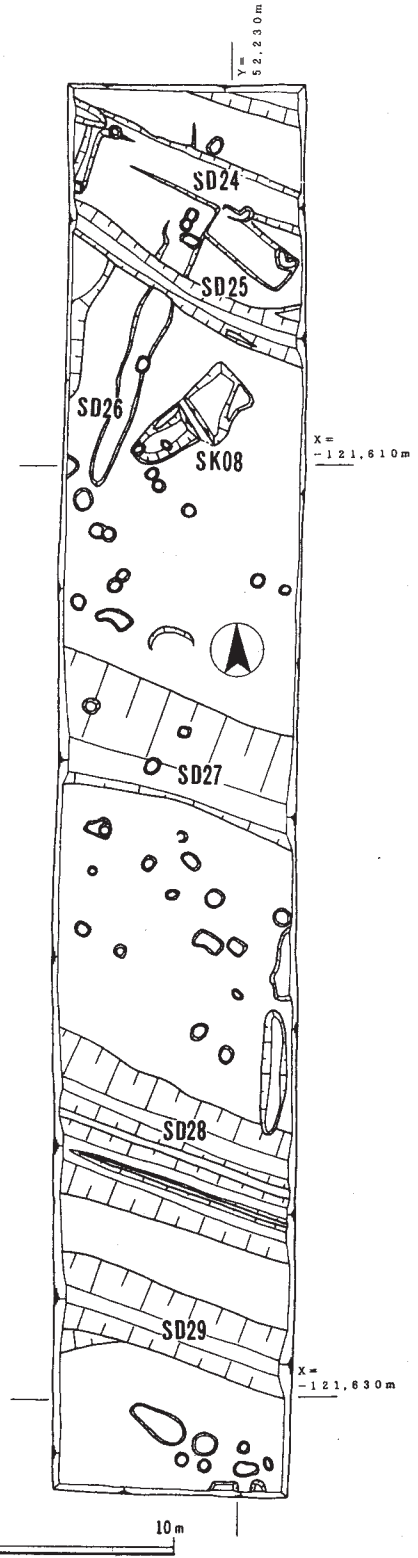


第 6 図 西谷 4 地区、西高木 2 地区遺構実測図 (1 : 160)

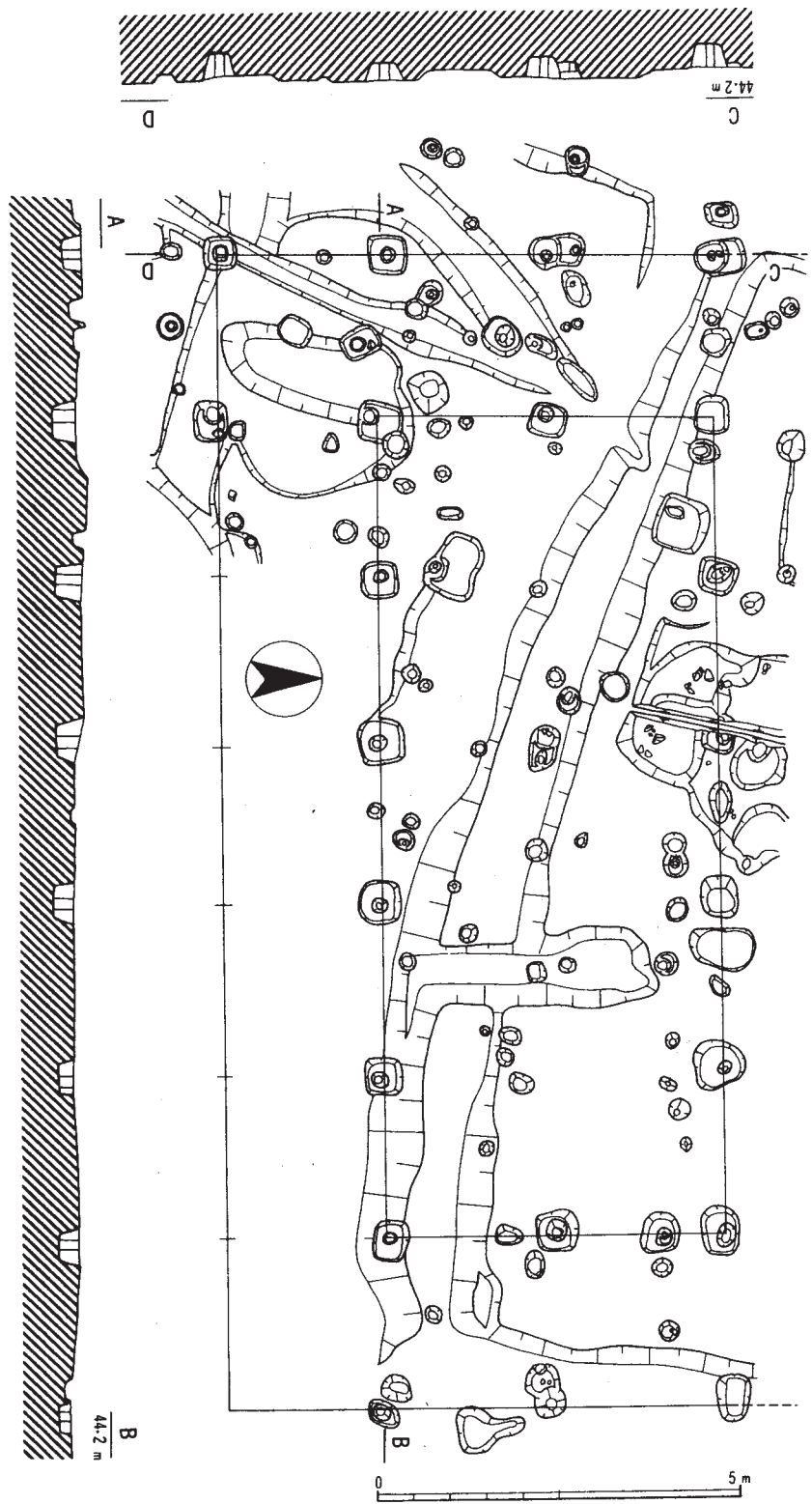
西谷5地区



南浦1地区

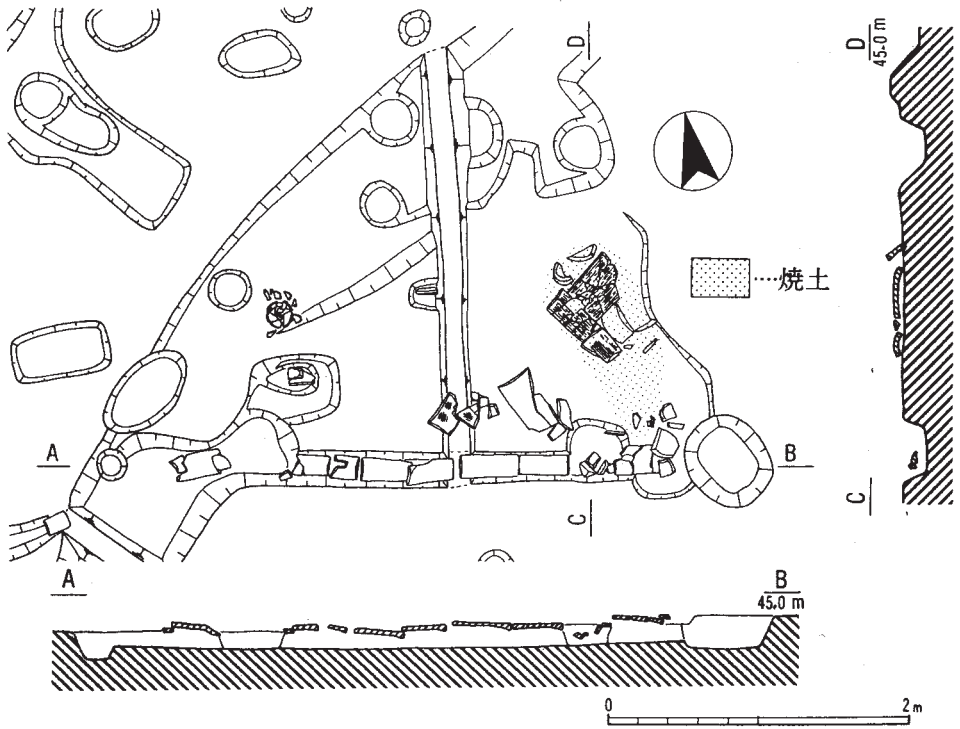


第7图 西谷5地区、南浦1地区遺構実測図 (1:160)

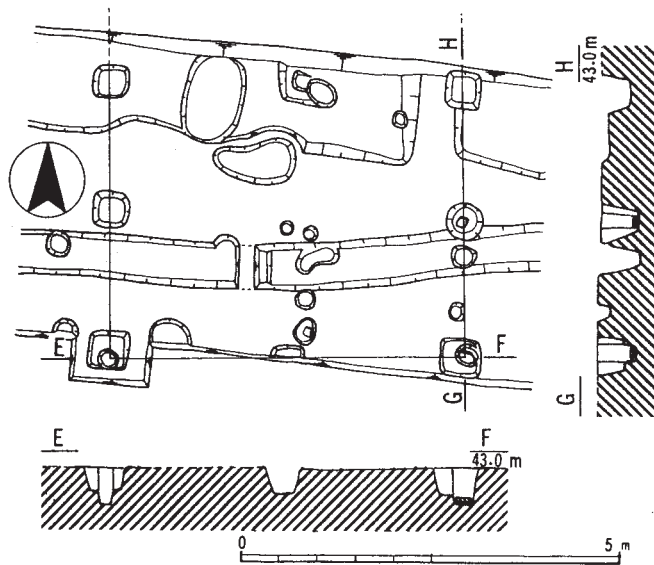


第8図 S B01実測図 (1:100)

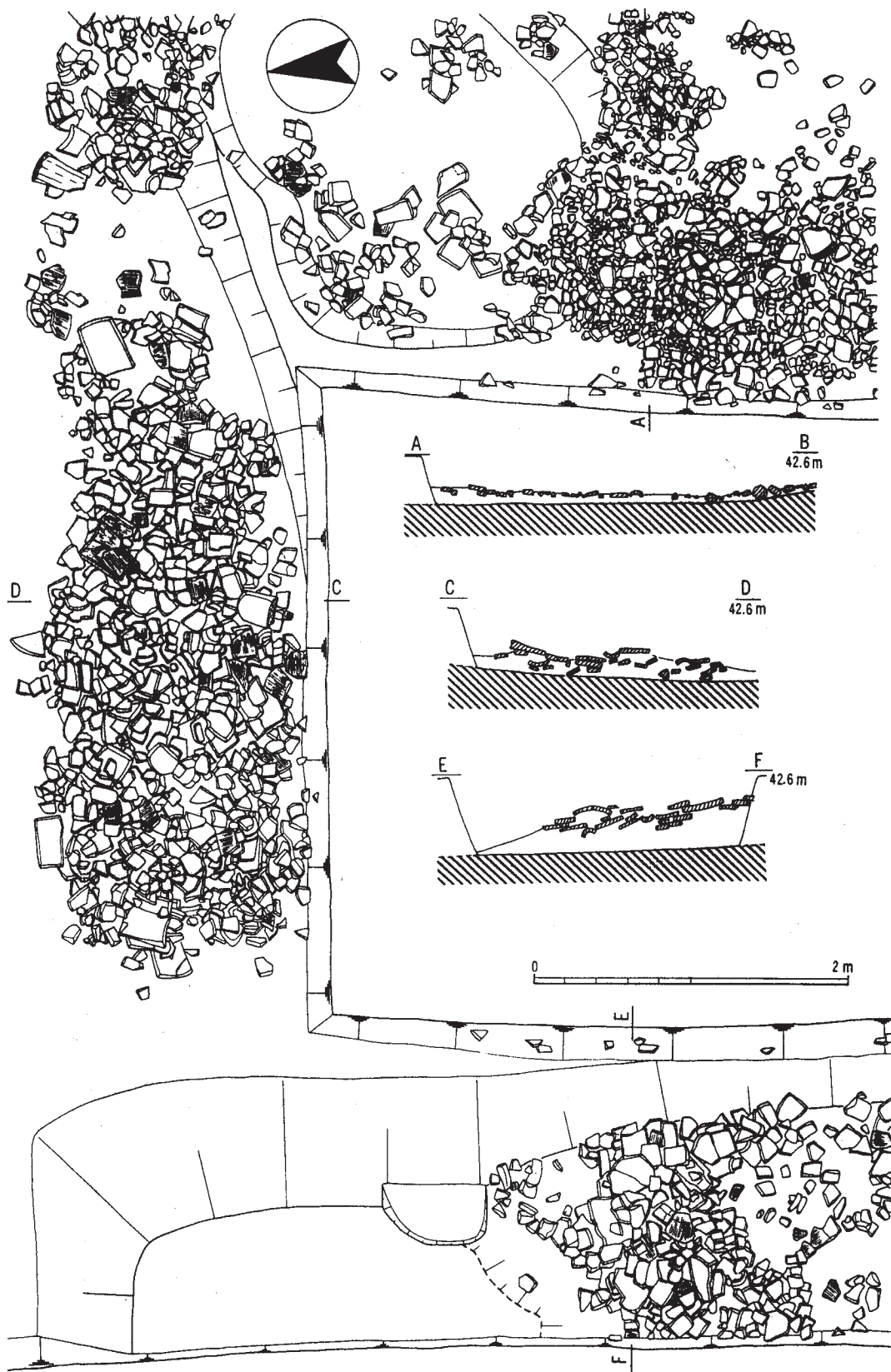
S B03



S B04



第9图 SB03(1:50)、SB04(1:100)实测图



第10圖 S D05、 S X02 瓦出土狀況 (1:40)

土師器高杯(3) 推定高台径20cm、口縁端部は内面で稜を持ち丸くおさまる。

須恵器蓋(4~6) 何れも宝珠摘みを有する蓋で、頂部はロク口削りされている。口縁端部は下方に屈曲し、外面はやや内側に湾曲する。口径は14.8cm(4)、18.2cm(5)、18.6cm(6)、胎土は緻密で灰白色を呈する。平城宮土器 期に併行する。

土師器杯(7) 口径17.4cm、器高6.2cm、高台径12.0cmの大型の杯身で、口縁端部はやや外反しながら丸くおさまる。体部下半部と底部はロク口削りされている。胎土は0.5mm砂粒を少量含み、灰褐色を呈する。同じく平城宮 期併行。

土師器蓋(8) 推定口径14cm、宝珠摘みが付くものと思われ、頂部はロク口削りされている。胎土は緻密で肌色を呈する。

須恵器杯(9) 口縁部を欠くが、高台径6.4cm、推定口径9cm前後の小型の杯身で、体部は内外面共ロク口削りなどで、底部はロク口削りされている。胎土は緻密で青灰色を呈する。

(西谷5地区) 10・11; SK07、12~14; SD19

土師器杯(10) 口径12.4cm、器高4.8cm、高台径11.0cmの杯身で、磨滅が著しく調整技法は不明。17.5cmで、胎土は緻密で赤肌色を呈する。平城宮 期併行。

土師器甕(11) 口径12.4cm、口縁は「く」の字に大きく外反し、体部は丸く湾曲する丸底の甕と思われる。剥離が著しく調整技法は不明。赤肌色を呈し、胎土は1mm前後の砂粒を多く含む。

瀬戸壺(12) 古瀬戸四耳壺の高台部分と思われる。推定高台径13cm、胎土は緻密で、黄褐色の灰釉が施されている。

山茶碗(13・14) 高台径7.5cm(13)、7.0cm(14)で、砂圧痕を残す三角高台が付く。底部からはなだらかに立ち上がり、胎土は緻密な砂質系で、灰白色を呈する。知多古窯産と思われ、中野編年1段階2型式(清水山第3号窯期併行)にあたる。

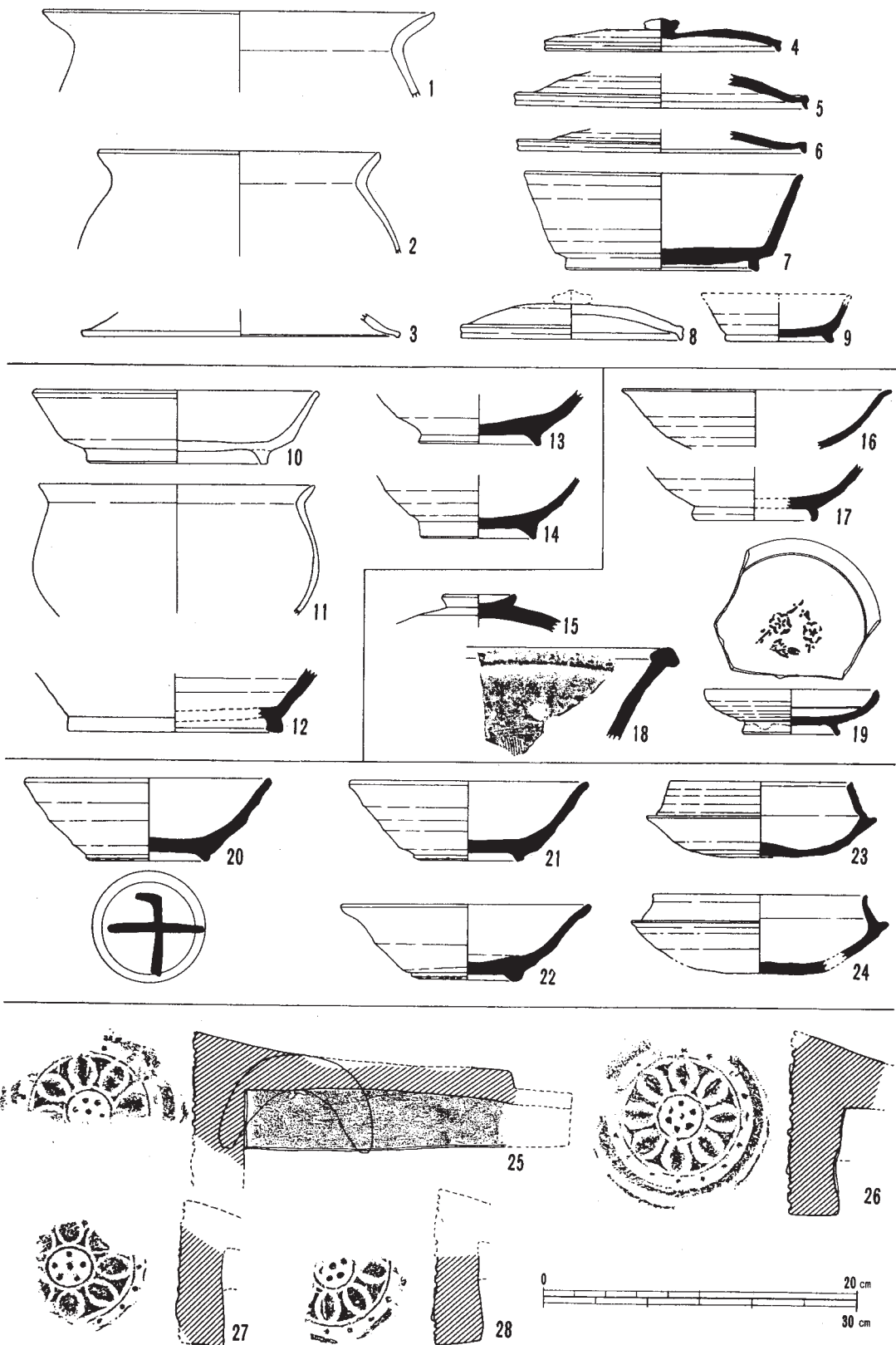
(西高木2地区) 15・17~19; SD05、16; SX02

須恵器蓋(15) つまみは中心が凹面をなすもので、外面ロク口削り、内面ロク口削りなどで、胎土は緻密で淡青灰色を呈する。

灰釉碗(16・17) 16は口径17.0cmで口縁端部はやや外反しながら細かくおさまる。18は底径7.4cm、三日月高台の付く底部は糸切りの後ナデ消され、両碗とも灰釉は刷毛塗りされている。胎土は緻密で灰白色を呈する。黒笹90号窯期併行。

瀬戸摺鉢(18) 瀬戸の本業焼の製品と思われる。推定口径35cm前後で口縁端部はキノコ状に丸く両側に張り出す。全面に錆粕が施され、櫛目が一部みられるが単位等は不明。19世紀代。

梅文皿(19) 同じく瀬戸の本業焼の製品と思われ、口径10.8cm、器高2.9cm、高台径6.0cm、外面・底部共ロク口削りされている。内外面に長石軸がかけられ、内面底には鉄絵で梅花が描かれている。19世紀前半。



第11図 出土遺物実測図1 (土器類は1:4、瓦類は1:6)

(南浦1地区) 20 ~ 22 ; SD25、23・24 ; SK08

山茶碗(20 ~ 22) 口径14.8 ~ 15.4cm、高台径5.8 ~ 7.1cm、器高4.8 ~ 5.4cmで、底部見込み部分からやや角度をもって直線的に立ち上がる。高台は退化しており、粗殻痕が見られる。胎土は0.5 ~ 1mm砂粒を多く含み、灰白色を呈する。底部糸切り部分に墨書が認められるのが2点あり、20は「十」であろう。中野編年代 段階4型式(福住第33号窯期併行)。

須恵器杯(23・24) 口径は11.4cm(23) 13.2cm(24) 器高は4.9cm(23) 4.1cm(24)。底部は口く口削りされ、23はたちあがり長く直線的で内側に段を持つ。24は口縁端部がやや外反し丸くおさまる。胎土は共に砂粒を少量含み、青灰色を呈する。23は中村編年 型式5段階、24は 型式2段階に当たる。

2. 瓦 類 25・26・29 ~ 37 ; 西高木地区 SD05、27・28 ; 西谷5地区 SD19

軒丸瓦(25 ~ 28) 3型式の瓦が確認される。何れも単弁八葉蓮華文瓦で、25・26は Ca型式、27は B型式丸瓦である。25・26は径4.2cmの中には1 - 6個の蓮子を配し、外区は16個の珠文帯の外に幅1.0cmの陽帯が取り巻いている。径17.0cm前後。内面は布目痕の後、横にへら削り、外面もへら削り成形されている。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。25は玉縁部分を欠くが全長は36cm前後になるものと思われる。27は全体が楕円形を成し、径3.8 ~ 4.3cmの中房に1 + 5個の蓮子を配する。外区は16個の珠文帯で、胎土は緻密で黄灰色を呈する。28は彫りが平面的な瓦で、径4.2cmの中房には1 - 6の蓮子を配する。推定径は14.5cm、胎土は級密で黄灰色を呈する。

軒平瓦(29 ~ 31) 2型式の瓦が出土している。何れも均整唐草文瓦で、29・30は A型式、31は Ba型式軒平瓦である。29・30は二重のハート形の中心花を中心に左右対称の唐草を配し、外区は30個の珠文帯。下弦幅は29.5cm、厚みは中心で6.0cm、表面は布目痕の後へら削り、裏面は全面へら削りされている。胎土は0.5mm砂粒を多く含み、灰白色を呈する。

31は退化した釣り針状の唐草を配するが、彫りは直角的で鋭い。厚みは残存片左端で6.4cm、焼成は極めて良好で、灰白色を呈する。

押印瓦(32・33) 今次調査では取り上げ時に2点確認された。2点共押印面は平瓦の裏面で、径2.5cmの丸印である。文字は読み取れない。

丸瓦(34・35) 国分寺出土丸瓦の総ては玉縁式瓦である。両瓦共全長34.0cm(玉縁部分5.5cm)、幅15.0 ~ 17.5cm(玉縁部分9.5 ~ 12.5cm)、高さ9.5cm(玉縁部分9.0cm)。外面はへら削り、内面は布目痕が明瞭である。胎土は0.5mm砂粒を多く含み、灰白色を呈する。

平瓦(36・37) 平瓦は大きさや成形技法などから数種類に分類できるが、ここでは完形に近い2個体を紹介する。36は幅22.3 ~ 27.0cm、厚み2.5cmで、表面は叩きの後、横削り、裏面は平行の縄叩きの後、斜め叩き成形。37は幅21.0 ~ 25.5cm、厚み2.0cmで、表面は布目痕の後、斜め叩き、裏面は斜め叩き成形。面は共に丁寧にへら削り成形され、表面に面取りが施されている。焼成は極めて良好で、胎土は微密で淡青色を呈する。

図示しなかったが、SD05からは鬼瓦の目の部分が出土している。

・伊勢国分寺跡出土軒瓦について

伊勢国分寺跡から出土したとされる軒瓦はこれまでに膨大な量にのぼり、それらは地元の国分町公民館を始め、市内の小・中・高等学校、各個人などに分散保管されているが、これまでに散逸・紛失したのも少なくない。これほどの出土量があり、かつ種類も多種に及ぶにも関わらずこれまでに体系的に研究がなされたことはない。ここでは、筆者の知見の範囲内で軒瓦を型的に分類を行った。従って、ここに掲載していない型式の瓦の存在も十分に予想される他、国分寺出土とされる瓦が実際は他の寺院・官衙・瓦窯跡からの出土品である可能性もあることを先ずは断っておきたい。

これまでに伊勢国分僧寺・尼寺跡から出土したとされる軒瓦は軒丸瓦9型式16種類、軒平瓦9型式18種類に及ぶ。

軒丸瓦

I型式 重圏文軒丸瓦。何れも三重圏文で、現在4例確認している。径の相違等によりさらに2種類に細分される。

A型式 径14cm、圏線の幅は0.5cmとやや厚い。同じ径の重圏文瓦が八野瓦窯跡から出土している。

B型式 径18cm、圏線の幅は0.3～0.4cm。

型式 単弁八葉蓮華文軒丸瓦。蓮弁は先端で尖り、子葉は長方形。中房は蓮子が1+8個で、径32mmと幅が狭い。外区は珠文は認められず、素文帯であろう。径16cm前後。推定尼寺跡出土の他、寺山遺跡でも出土している。

型式 単弁八葉蓮華文軒丸瓦。量的にはこの型式の瓦が圧倒的に多く、創建瓦と考えられている。細部の形状の相違からさらに4種類に分類される。

A型式 径17cm前後で、弁先は尖り、楕円形の中房の中に1+5個の蓮子がある。外区は16個の珠文帯で、彫りは深く鋭角的である。出土例が最も多い。

B型式 全体的にはA型式と類似するが、径が14.5cm前後と小振りで、中房は真円で蓮子は1+6個で、間弁が幅広く、彫りが平面的である。

C型式 中房の蓮子は1+6個で、外区に16個の珠文帯、その外周に幅0.5～1.0cmの陽帯を持つのが特徴である。彫りの状態でさらに2種類に細分される。Ca型式は径17cm、A型式と同一の鋭角的な彫り方で、陽帯は0.5～1.0cmと幅がある。Cb型式は径17.5cm、B型式と同一の平面的な彫り方で、陽帯は幅1cm前後で平均的である。

D型式 短径12.5cm、長径14.0cmと全体が楕円形で、伊勢国分寺瓦の中では最も小さい。中房の蓮子は1+5個、外区の珠文は同じ16個である。

型式 単弁八葉蓮華文軒丸瓦。径4.3cmの中房には1+8個の蓮子を配する。蓮弁は彫りが薄く殆ど輪郭線のみで、外区は27個の珠文帯である。径16cm。推定尼寺跡出土とされるが、出土例はこの1点のみで、他遺跡出土の可能性もある。

型式 単弁十二葉蓮華文瓦。3種類が認められる。

A型式 径4.2cmの中房には19個の蓮子を配し、蓮弁は型式瓦の蓮弁に類似する。外区は珠文帯で、珠文は36個あるものと思われる。径13.5cmと小振}である。推定尼寺跡出土。

B型式 蓮弁は均整のとれた楕円形を呈し、中房は径5.8cm、1 + 6 + 12個の蓮子を持つ。外区は35個の珠文帯で、径16cm。

C型式 ハート形に弁先が割れているのが特徴で、外区は24個の珠文帯を持つ。径16cm前後で、同型式の瓦が川原井瓦窯跡から出土している。

型式 単弁十四葉蓮華文瓦。モチーフとしてVB型式瓦に類似する。中房は径5.0cm、1 + 4 + 8の蓮子を持つ。外区は25個の珠文帯で、径17cm。推定尼寺跡出土と伝えられている。川原井瓦窯跡より同型式の瓦が出土している。

型式 複弁八葉蓮華文瓦。1点のみの出土例で、中房は明確でないが、半球状の大きな蓮子が1個あるものと思われる。蓮弁は蟹挟みを彷彿させる深い切り込み状の複弁で、外区は唐草を縦2本と横1本を交互に組み合わせた文様帯である。径18.5cm前後。

型式 複弁八葉蓮華文瓦。径6.2cmの中房の中は1 + 8個の蓮子を配し、外区は珠文もなく、素文帯である。四日市市智積廃寺出土の軒丸瓦・類に類似する。径17cm。

型式 複弁十二葉蓮華文瓦。藤原宮系の瓦で、中房径5.5cm、蓮子数1 + 8 + 12個。外区は36個の珠文帯で、外区外縁は0.8cmの陽帯を持つ直立縁である。径18cmと国分寺出土瓦中最大である。

軒平瓦

I型式 弧文瓦で出土数は多くない。弧数によりさらに2種類に分類される。

A型式 単弧文瓦で1点のみ確認している。弧文幅0.6cm、厚さ2.2cmと薄い。

B型式 重弧文瓦で、すべて四重弧文瓦である。さらに顎が直線顎のもの(1Ba型式)と段顎になるもの(1Bb型式)に細分される。1A型式瓦幅3.2cm、1Bb型式瓦幅3.4cm。1Bb型式瓦の内、1点は推定尼寺跡からの出土が確認されている。

型式 同じ重弧文であるが、弧文は陰刻で、厚さ2.5cm、細い線とやや太い線の二重弧文である。推定尼寺跡からの出土で1点のみ確認されている。

型式 四重弧の重廓文で、サイズの違う2種類が出土している。

A型式 厚さ2.5cmの薄い重廓文瓦で、1点のみ確認されている。

B型式 厚さ4.5cm、広瀬長者屋敷遺跡出土の重廓文瓦と類似しているが、国分寺出土のほうが隅角がより鋭角的である。

型式 均整唐草文瓦。A型式を第1段階として、さらに4種類に型式変化をとげる。

A型式 外区の珠文は13 + 2 + 2 + 13個、中心飾りは二重で左右にのびる蔓は巴状である。下弦幅は29.5cm、厚み6.0cm。国分寺出土瓦中、最も多い出土量で、軒丸

瓦 型式と共に創建瓦と考えられている。何れの瓦にも左上方に笠割れの明確な痕跡が見られる。また、唐草・珠文の太いものとそうでないものがみられる。

B型式 A型式を少し形式化された文様で、中心飾りは鼻状を呈し、蔓は直線的で巻き込みが大きい。外区珠文数は $15 + 2 + 2 + 15$ 個。厚み 6.5cm、幅は上弦幅で 28cm。珠文数が 34 個ある Ba 型式と、同文様で珠文数はさらに多く、内区幅の狭い Bb 型式、さらに偏平的な Bc 型式に細分される。 Ba 型式で下弦幅は 28cm、厚み 6.5cm。

C型式 蔓は巻き込みが大きく、外区は密接な珠文帯である。同型式の瓦が川原井瓦窯跡から出土しており、同範の可能性もある。

D型式 蔓はさらに単純化され、短く、釣り針状を呈する。中心飾りは 2 個の珠文を楕円形に取り巻き、外区の珠文は $14 + 2 + 2 + 14$ 個。厚み 6.5cm、幅は上弦幅で 13.5cm。

型式 均整唐草文瓦。中心飾りは Y 字形の蔓に唐草がハート状にとりまき、蔓は長く流調である。さらに 2 種類に細分される。

A型式 外区の珠文は $14 + 2 + 2 + 14$ 個と思われ、厚み 5.5cm、幅は上弦幅で 13.5cm。

B型式 文様の形態は VA 型式と同じであるが、蔓が輪郭線のみで表現されている。また、2 点発見されているが、2 点共、笠そのもの原因によるものかまた、成形時に加工されたものか不明だが、珠文帯は部分的に削り取られており、瓦そのものを薄くしている。厚みは中心で 4cm。1 点は国分町集落内の光福寺境内からの出土で、削り取られていない同型式の瓦が川原井瓦窯跡から出土している。

型式 均整唐草文瓦。中心飾りは珠文 1 個と U 字状蔓に取り巻き、蔓は厚みを持たず芦の葉状に細線化されている。外区珠文は $13 + 2 + 2 + 13$ 個、下弦幅で 27cm、厚みは最大で 8.8cm と国分寺軒平瓦中最大である。焼成が良いのか完形品で出土する例が多い。

型式 1 点のみ出土で、均整唐草文と思われる。中心飾りは半円状の蔓を横 8 の字にとりまく。外区は珠文帯であるが、外縁は明確な直立線なのが特徴である。厚み 7.3cm。

型式 これも 1 点のみ出土で、左端のみで全体を把握し得ないが、唐草文様は B 型式に類似している。特徴的なのは、内区脇が狭まり、外区縁は幅 1cm の陽帯であり、脇下方は角ばらず湾曲している。

型式 磨滅により文様は明確ではないが、均整唐草文と思われ、珠文帯はなく、蔓が縦に平行状に並んでいる。厚み 5.5cm、1 点のみ確認されている。

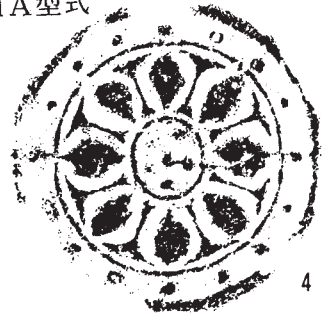
I A型式 I B型式



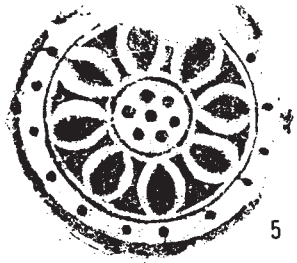
II型式



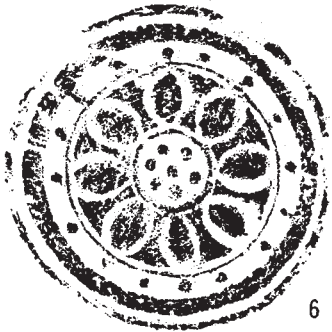
III A型式



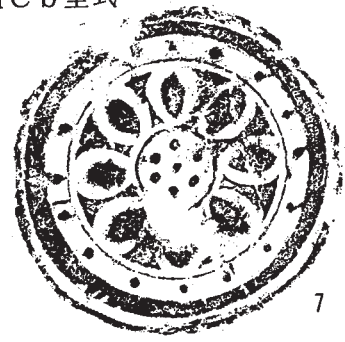
III B型式



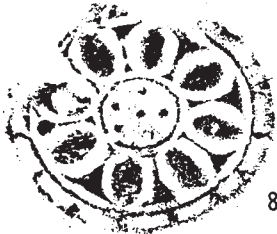
III C a型式



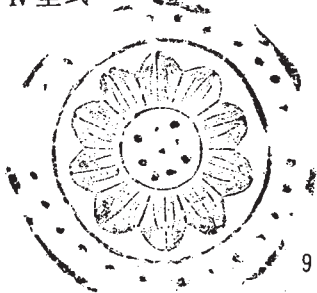
III C b型式



III D型式



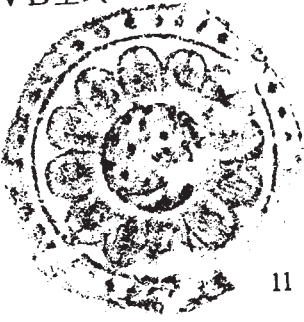
IV型式



VA型式



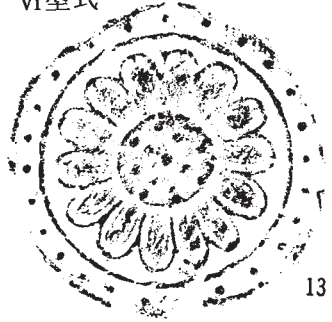
VB型式



VC型式



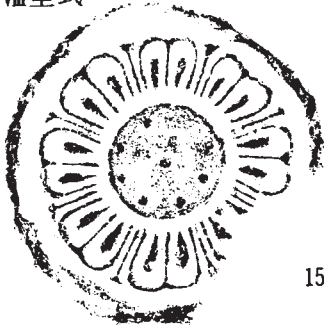
VI型式



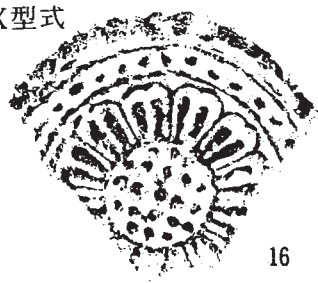
VII型式



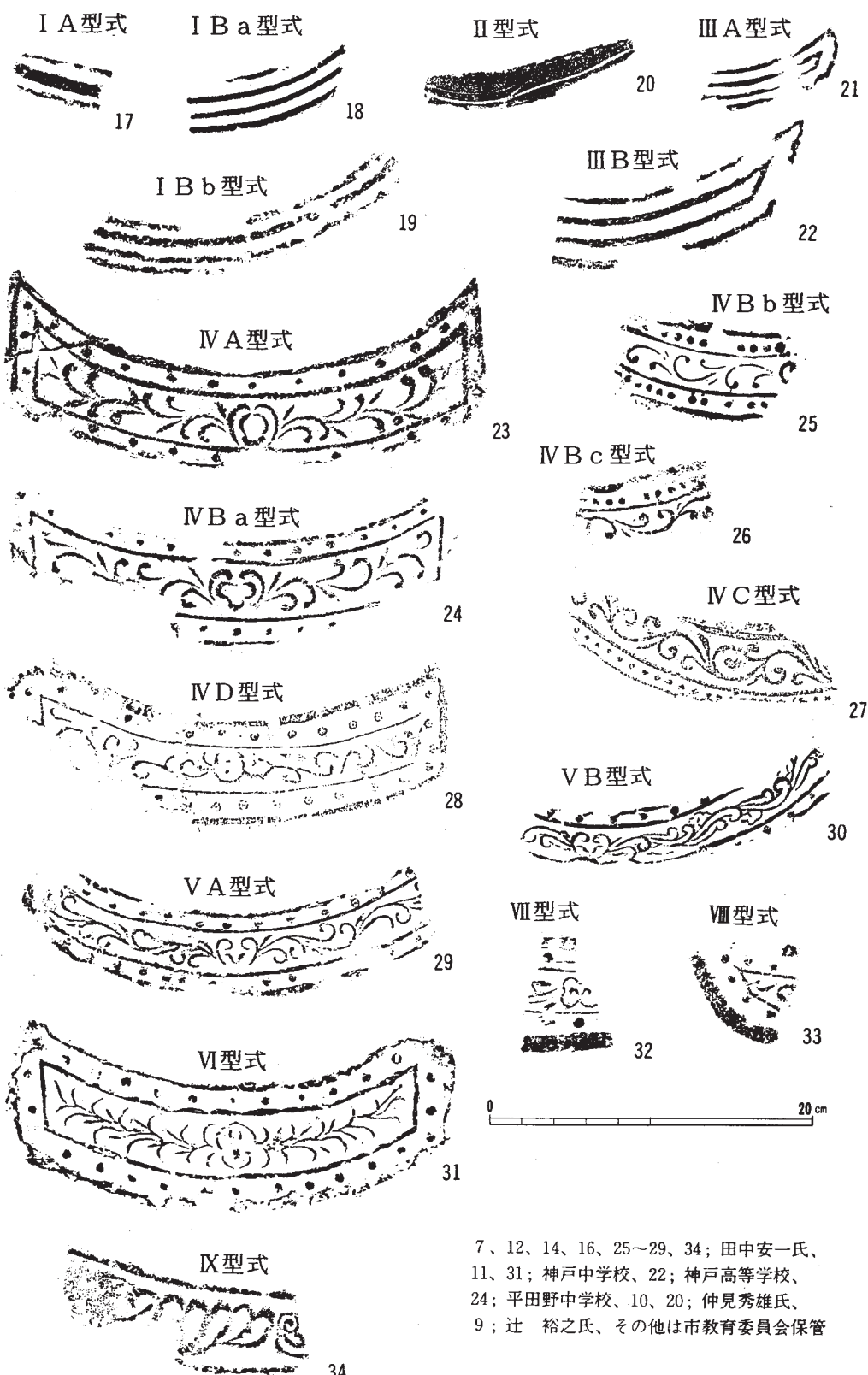
VIII型式



IX型式



第13図 伊勢国分寺跡出土軒丸瓦型式一覽 (1:4)



7、12、14、16、25~29、34；田中安一氏、
 11、31；神戸中学校、22；神戸高等学校、
 24；平田野中学校、10、20；仲見秀雄氏、
 9；辻 裕之氏、その他は市教育委員会保管

第14図 伊勢国分寺跡出土軒平瓦型式一覧 (1:4)

・小 結

第3次調査は、西谷1地区で検出された掘立柱建物に続く建物群の有無（西谷4地区）、寺域南西部の遺構の有無（西谷5地区）、南門の検出（西高木2地区）、国分尼寺跡関連遺構の発見（南浦1地区）を主目的に調査区を設定して実施した。必ずしも予想通りの検出状況ではなかったが、ここでは2、3の遺構・遺物の問題点を提起して小結としたい。

SB03 について

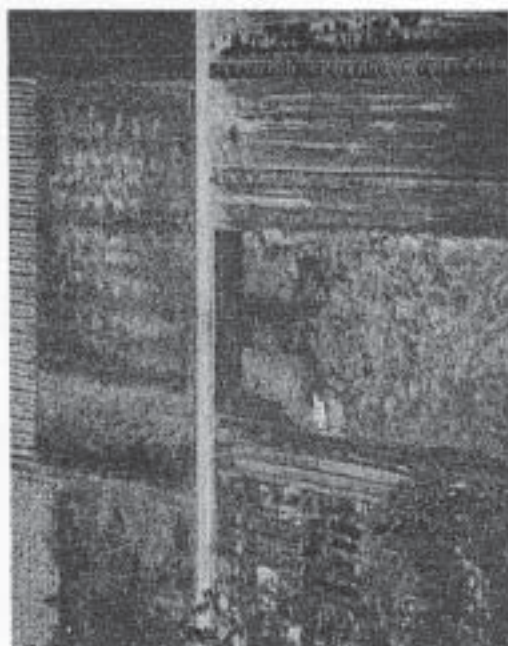
竈が備えつられている以上、住居跡には間違いないが、その竈と瓦列との関係が問題となろう。瓦列が住居跡の一部だとすれば、それは住居跡の南辺を区切る縁の役目を果たしていたものと解釈される。しかし、竈の焚口の方向からすると瓦列は必ずしもその方向と合致せず、45度逆時計回りの角度でなければ不自然である。竈を含む住居と瓦列は全く無関係であることも十分考えられよう。また、住居跡のプランが明確でないが、竪穴住居と即断するには無理があるように思われる。ここより約30m北西で検出された竪穴住居SB02は約30cm程の深さがあり、もしSB03が竪穴住居であるとするれば、このSB03だけが削平されたとするには無理があり、竪穴を掘らない「平地式住居」の可能性もある。瓦を住居に転用した例はこれで2例目だが、国分寺瓦の廃材を利用したというのではなく、存続時期からいっても国分寺造営時と同時に新品瓦を利用したものと考えられる。住居の性格としては、SB01の厨房施設あるいは造営に直接関わる工人の住居などが考えられよう。

SX01の性格について

南築地の丁度中間の位置が西高木2地区の東方にあたり、南門の検出が予想されたが、期待に反し明確な南門の遺構は検出されなかった。しかし、発掘区の西端で検出されたテラス状の遺構は何らかの施設があったものと思われる。瓦はそのテラスを中心に堆積しており、また、他の築地外溝に見られない軒瓦の出土が圧倒的に多い。また、外部の瓦敷の施設を考えるとSX01は「南門跡」の一部と考えるのが妥当のように思われる。しかし、位置的にやや西に偏っていることもさることながら、明確な基壇・版築が見られないことから、南門は掘立柱建物の可能性もあり、さらに詳しいことは西方の調査を待たねばならない。

軒瓦の組み合わせについて

SX01周辺の溝から出土した軒瓦はすべて軒丸瓦 Ca型式と軒平瓦 A型式である。SX01が南門跡であるとするならば、南門はこの形式の組み合わせで葺かれていたことになる。これまで軒丸瓦 Ca型式と軒平瓦 A型式は伊勢国分寺の創建瓦の一つとして考えられてきた瓦である。伽藍内部の調査がなされていない現時点では、この組み合わせがこれからの堂塔の軒瓦の組み合わせを考える上で一つの示唆を与えることになる。



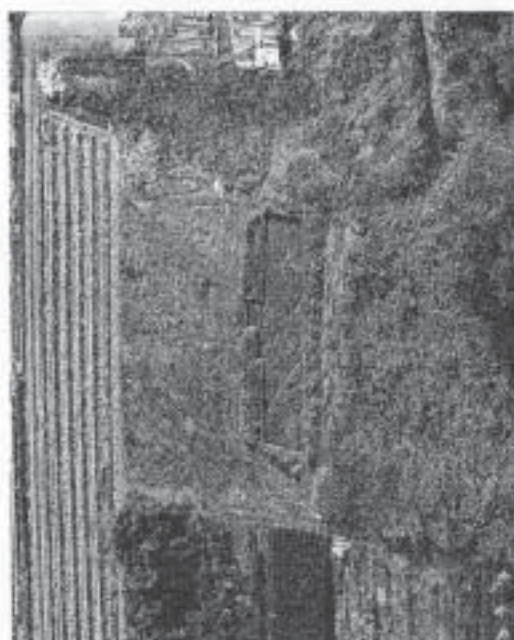
西谷5地区全景(南より)



西高木2地区全景(南より)



伊勢国分寺跡全景(北より)
写真中央が僧寺跡、左上方が推定尼寺跡



西谷4地区全景(西より)



西谷5地区SB 04(西より)



西谷5地区SK 07(西より)



西谷4地区SB 01(北より)



西谷4地区SB 03(東より)



西高木2地区 SX 01 (北より)



西高木2地区 SD 05 瓦出土状況 (西より)



西高木2地区 SX-S, SD 05 (東より)



西高木2地区 SD 05 瓦出土状況 (北より)



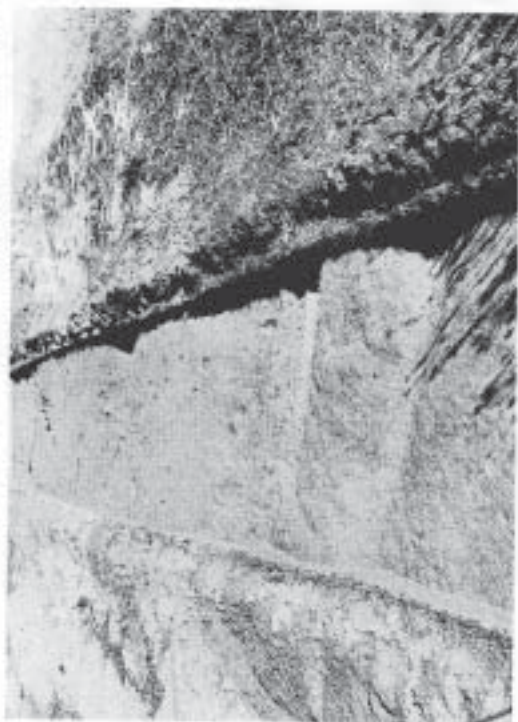
南浦1地区SD25土器出土状況(北より)



調査指導風景(西谷4地区)



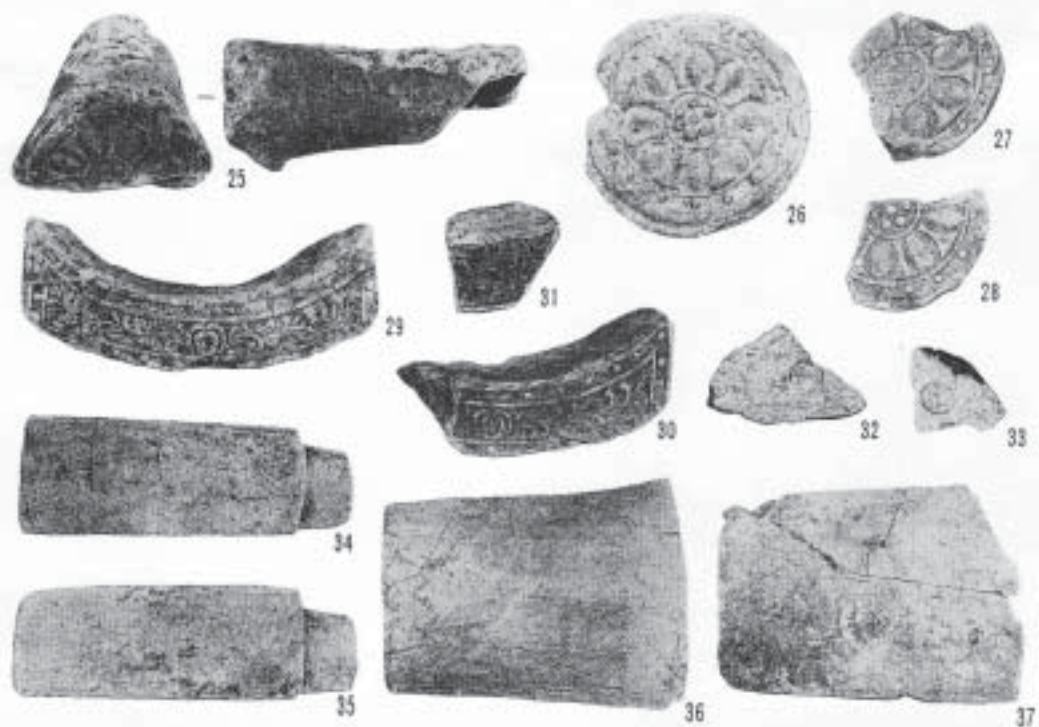
南浦1地区全景(北より)



南浦1地区SD27、29(南より)



伊勢国分寺跡第3次調査出土土器



伊勢国分寺跡第3次調査出土瓦